



Title	ジェラルド・ド・ネルヴァルにおける祝祭の観念 : Aurélia=祝祭の夢
Author(s)	七尾, 誠
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1983, 17, p. 35-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47749
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジェラルド・ド・ネルヴァルにおける 祝祭の観念— *Aurélia* = 祝祭の夢 —

七 尾 誠

1) 序

たとえば、*Sylvie*の主人公を自らの過去の探索行へと向かわせる方向転換機として機能しているのは、まぎれもなく《村の花束祭》という一行の新聞記事である。また、大著 *Voyage en Orient* は、たとえそれが実際の行動記録とリヴレスクなフィクションのアマルガムであるにしても、祝祭から祝祭へと巡り歩く旅人の日録に他ならない。ほかにも沢山の例をあげることができるが、このように NERVAL の全作品を通じて頻出する祝祭というものはどのような意味を持ち、またどのような機能を果しているのだろうか。以前に『肉牛祭』*Le Boeuf gras* と題されたルポルタージュ、および作品集『火の娘たち』*Le Filles du Feu* 所収の『イシス』*Isis* というふたつの小品を題材として分析した結果、⁽¹⁾ 祝祭というものが彼に与える観念もしくはイメージは大別して次のようなふたつの側面を持っていることが明らかになった。簡単に再説しておこう。

(1) 彼にあっては、祝祭とはまず第一に以下のような特権的な場である。つまり、ひとはその中において世界のもしくは自己の源泉に触れると同時に、丁度エジプト神話のオシリスに習うが如くに仮の死を通過したのちにより活性化され聖化された姿となって再生するという祝祭そのものが内包するドラマを追体験する。その結果、本来のあるべき自己へと再生する事

が可能となるのである。この意味で、祝祭とはいわば再生の為の initiation の試練 *épreuve* の場であると言える。

(2) 同時に、祝祭とは日常の真只中に突然出現する非日常であり、その中においては対立する諸々の事象・要素（貧富、階級、善悪、異なる思想信条等）がひとつに溶け合わされ、そしてその内のどのひとつのものも抑圧されたり打ちすてられたりすることなしに新たな発展を遂げることができそうな場でもある。また、言うまでもなくそこでは時間という人間に課せられた重い足かせも廃棄される。この意味で、祝祭とは Nerval が自ら仏訳したゲーテの *Faust* に付した序文中で憧れを表明したあの *syncrétisme* の理想⁽²⁾が現実のものとして形をとる事が可能な場なのである。

さて、この小論の目的は以上のようにして得られた祝祭の観念についての認識を武器として、遺作 *Aurélia* 分析の為のひとつの手がかりを提示しようということにあるのだが、その作業に入る為の手立てとして、まず以前に同様の手順⁽³⁾で *Voyage en Orient* を分析した時の結果を簡単に示しながら、この作品と *Aurélia* との間の関連について述べてみたい。

2) *Voyage en Orient* の *moralité* 及び *Aurélia* との関連

J. = P. RICHARD はその《*Géographie magique de Nerval*》の中で、*Voyage en Orient* の旅人の *allure* について次のように分析している。

On monte, on descend, on s'arrête, on cause avec un voisin, on dîne, on dort, puis on repart. La seule loi du déplacement c'est ici l'absence de loi, la soumission au hasard et à l'instant.⁽⁴⁾

このように旅人の足取りにも秩序が無いように見え、また全体の構成も一見乱雑であるかのような *Voyage en Orient* ではあるが、祝祭というものに着目して分析してみれば、実際にはひとつの一貫した流れを持っていることに気付かせられる。《序章》において話者は、自分は Orient へ太陽

を求めておもむくのだと言う。⁽⁵⁾《太陽》、それはすなわち《全ヨーロッパ文明の源泉》= Orient の象徴であり、同時に彼自らが急速に失ないつつあると痛感している精神的肉体的エネルギー及び創造力をも象徴しているのである。また、1843年10月5日頃の父あての書簡を見れば、⁽⁶⁾この灼熱の土地への苛酷な旅行は、単なる取材旅行と言っただけのものではなく、狂人としての自己からの guérison を世間に対して提示する為の手段でもあったことが理解される。つまり、この作品は当時流行の東方の珍奇な風俗の軽妙なルポルタージュという衣装をまとったひとつの *histoire initiatique* なのである。この *histoire initiatique* においては、Orient という《人類共通の源泉》、《ヨーロッパ文明の揺籃》すなわち source に触れて若返り、*initié* となって自らの guérison を得る initiation の試練は、祝祭という場をかりて主人公に提供される。彼はこの祝祭という名の試練の場に全的に参入する為に（全的に参入するとは、仮の死の後の再生という祝祭の内包するドラマを完全に自己に引き受ける、すなわちそのものに s'identifier することであり、それなしには彼は単なる傍観者にすぎず、*initié* への道は閉ざされたままに終る）、《tayeb》という万能の key・word の使用、変装による参入の試み、そして *initié* の娘との結婚の試みといった様々な武器・手段を用いる。だが結局は彼自身の不決断、自らが initiation に参入しようとしているのだという認識の欠如、仮の死に匹敵すべき自己否定の不徹底等の理由から彼は挫折する。なかでも最後の結婚の試みの失敗は、それが Druses というすぐれて *synchrétique* な教義を持つ民の *initié* の娘とのものであり、その準備の為の様々な試練を通過して遂に成功がかちとられる寸前のものであり、さらに原因が彼自身の内部にあるのではなく、一種の風土病という非常に不条理な形で外部から突然襲来する障害であるだけに一層暗示的である。つまり、このことは現実という局面では彼が祝祭に全的に参入することはまったく不可能であることを示しているかのような

のである。そして実はここにこそ *Voyage en Orient* のひとつの^{モラリテ}教訓とでも呼ぶべきものがあるのだ。1843年11月 Orient からの帰途マルタ島沖の船上から Jules JANIN にあてた書簡には以下のような悲痛な自嘲のつぶやきが見られる。

En somme, l'Orient n'approche pas de ce rêve éveillé qu'é j'en avais fait il y a deux ans, ou bien c'est que cet Orient là est encore plus loin ou plus haut, j'en ai assez de courir après la poésie; je crois qu'elle est à votre porte, et peut-être dans votre lit.⁽⁷⁾

さて、ここで *Voyage en Orient* が提示してくる^{モラリテ}《教訓》の内容を整理してみよう。まず Orient に代表される源泉がひとに対して行使する若返らせ再生させる力は有効である。しかしひとがその恩恵を十分に享受し完全なる再生に至る為には、彼は自己の完全な変革の為の initiation の試練に耐えねばならず、仮の死は不可欠である。けれども Orient での旅人の数々の挫折はそれが現実の局面の上ではもはや実現不可能であることを暗示している。そしてこの事実は次のようなふたつの事柄を示しているように思われる。つまり今後 guérison を求めるべきは現実世界の中にではなくてもうひとつの祝祭空間である夢の世界の中にであり、また求めるべきは自己のみの guérison・再生ではなく、もはや一人の旅人の再生さえ望むべくもないほどに疲弊しきったこの現実の宇宙全体の再生をも求めねばならないのである。すでに *Voyage en Orient* 中においても後の *Aurélia* 冒頭の一節に直接的に結びつく次のような述懐をわれわれは見いだすのだ。

Il est certain que le sommeil est une autre vie dont il faut tenir compte. (…)

On rit beaucoup en France des démons qu'enfante le sommeil, et l'on n'y reconnaît que le produit de l'imagination exaltée: mais cela en existe-t-il moins relativement à nous, et n'éprouvons-nous pas dans cet état toutes les sensations de la vie réelle?⁽⁸⁾

Orient の旅から得られたこのような認識（それは一種の諦念であると同時にひとつの新たな希望でもある）が *Aurélia* 制作の為に太いバック・ボーンとなっていることは明白であり、*Aurélia* 読解の為にはこの事実を考慮に入れるべきであると思われる。さて、以上のような視点に立ってこれから所期の目的であった *Aurélia* の読解作業にはいるわけであるが、紙幅の制限もあり個々の詳細な分析に至る余裕はないので、ここではこの視点から導きだされるいくつかの注意すべき問題点を指摘し、簡単な分析を加えることによって読解の為にひとつの手がかりを提示してみたいと思う。

3) *Aurélia*

Aurélia が *Voyage en Orient* と同様にひとつの *histoire initiatique* であることは、たとえば冒頭部分の《ひとつの長い病いの間の様々な印象をスウェーデンボリ、ダンテ、アプレイウスたちにならって描く⁽⁹⁾》という宣言によっても理解できるわけであるし、また第二部第六章の《聖なる initiation の試練》*épreuves de l'initiation sacrée*⁽¹⁰⁾ という箇所がこのことを一層明確にしている。そしてこの意味で *Voyage en Orient* と *Aurélia* の間には、前者がどちらかといえはかなりの不純物をまとって冗長であるのに対して後者は草稿と決定稿との比較⁽¹¹⁾によっても明らかのように言わば贅肉を削ぎ落された作品であるという差異はあるにしても、ある種のアナロジーが存在すると言えるだろう。ところで *Voyage en Orient* においては祝祭空間が試練の場として機能しているわけだが、同様の *histoire initiatique* である *Aurélia* においてその役割をになっているのは、ほとんど各章に現れる《夢》または同質の《現実生活への夢の流入》*l'épanchement du songe dans la vie réelle* と呼ばれる《狂気の発作による幻影》である。ここで少し、祝祭なるものと夢もしくは狂気の幻影というものについて比較してみると次のようになる。周知のように夢の中においては、日常眠ら

せられている潜在自我がそのくびきから解放されて目覚め、もうひとつ別の生を生きはじめる。こういった無意識の活動は言わば日常の真只中に構築された非日常にはかならないわけであり、このような性質からして夢を祝祭と同列に論じることは不自然ではないであろう。また、NERVAL 自身 *Aurélia* 末尾において、人間の条件からの解放という夢のこの性質を以下のように明確に描き出しているのである。

Le sommeil occupe le tiers de notre vie. Il est la consolation des peines de nos journées ou la peine de leurs plaisirs; mais je n'ai jamais éprouvé que le sommeil fût un repos. Après un engourdissement de quelques minutes une vie nouvelle commence, affranchie des conditions du temps et de l'espace, et pareille sans doute à celle qui nous attend après la mort.⁽¹²⁾

そしてまた、祝祭がそれ自体始原的に内包しているもうひとつの性質に着目すれば、われわれは夢と祝祭とを結びつけるアナロジーのもう一本の太い糸を見いだすことができる。それはすでに言及しておいた祝祭における（特に農的・宗教的色彩の濃い祝祭に顕著に見られる）仮の死を通過した後のより活性化・聖化された自己への再生というドラマである。*Aurélia* 冒頭の有名な一節は、われわれにこの関係をあざやかに示してくれている。

Le Rêve est une seconde vie. Je n'ai pu percer sans frémir ces portes d'ivoire ou de corne qui nous séparent du monde invisible. Les premiers instants du sommeil sont l'image de la mort; un engourdissement nébuleux saisit notre pensée, et nous ne pouvons déterminer l'instant précis où le moi, sous une autre forme, continue l'œuvre de l'existence.(...) le monde des Esprits s'ouvre pour nous.⁽¹³⁾

少し説明が簡単ではあるが、このように祝祭と夢との間にはアナロジーの太い糸が見いだされるのであり、それゆえに *Voyage en Orient* 分析に際

してわれわれが用いた祝祭の観念を中心軸として展開してゆく方法が *Aurélia* 分析に関しても有効であると言えるのである。

さて、このように夢というもうひとつの祝祭空間を試練の場として展開される *histoire initiatique* である *Aurélia* の読解についてであるが、前述のような理由からわれわれは *Voyage en Orient* との関連に着目して分析を行なうべきであると考え。つまり、Orient の旅人は主として自己変革の為の *initiation* の試練の場に身を置いているのだという自覚の欠如、それゆえの自己否定の不徹底といった理由から挫折に至ったのであるから、*Aurélia* の主人公がもしも《救済》すなわち *guérison* に至るならば、彼は当然のこととしてその自覚を手に入れ、仮の死に匹敵するような徹底した自己否定を行なっているはずである。だからわれわれが成すべきは、彼がそこに至る道の分析およびその流れが叙述全体におよぼす影響の吟味なのである。また同時に、*Voyage en Orient* から得られたもうひとつの教訓^{リテ}すなわち求めるべきはもはや自己の *guérison*・再生のみではなく疲弊^{モウ}きつたこの宇宙全体のそれであるという認識に着目すべきであろう。つまり、この作品においては主人公の視線あるいは関心は自己の内部へという方向から転じて他者そして彼をとりまくこの宇宙全体の方へと向かうはずであり（また、そうでなければ自己の *guérison* を手に入れることもできないのであり）、われわれはその流れを分析しなければならず、またこの転回の流れと前述の自己否定および自覚への過程とを関連させて検討して見るべきであると考え。

さて、先程も言ったように個々の詳しい分析結果の報告を行なう余裕はないのでだいたいのアウトラインのみを示しておこう。

Aurélia 中にもその制作上の困難さが報告されている短篇 *Sylvie*⁽¹⁴⁾とは喪失へと至る過程の物語であったが、*Aurélia* では逆に最初から喪失のテーマが提示される。そしてそれは主人公自身の過失 *faute* によるものであ

ることがはっきりとしている。

— Une dame que j'avais aimée longtemps et que j'appellerai du nom d'Aurélia, était perdue pour moi. Peu important les circonstances de cet événement qui devait avoir une si grande influence sur ma vie. (...) Condamné par celle que j'aimais, coupable d'une faute dont je n'espérais plus le pardon, il ne me restait qu'à me jeter dans les enivrements vulgaires (...).⁽¹⁵⁾

この遂にその内容の明らかにされることのない《faute》はこれ以降増殖し続けるすべての faute の核となっている。次に faute の自覚が現れるのは第一部九章であるが、そこに至る過程においては夢の各所に登場してこの宇宙全体の衰弱を説く initiateur または initiatrice たち（たとえば《叔父》を代表とする一群の祖先たち、山の街への案内人、消え去る女性、そして主人公自身の《分身》など）が主人公に対して彼の initié となる為の資格の欠如を暗示し続けるが彼は理解しないという状況が語られている。そしてこの第一部九章の《自覚》も、実は自己否定から再生へと直接つながるものではなく、次のように呪咀に満ち、それゆえに何ものをも否定しないという彼の syncretisme の理念に反し、宇宙全体の再建という方向とは裏腹な宣言に至るのである。この結果、彼は夢という祝祭空間（そのみが guérison への残された唯一の手がかりなのであるが）から Aurélia とおぼしき女性の叫び声によって追放され、第二部は更なる喪失を嘆く悲痛な叫び（《Une seconde fois perdue!》）によって開幕するのである。

《Eh bien, me dis-je, luttons contre l'esprit fatal, luttons contre le dieu lui-même avec les armes de la tradition et de la science. Quoi qu'il fasse dans l'ombre et la nuit, j'existe, et j'ai pour le vaincre tout le temps qu'il m'est donné encore de vivre sur la terre.》⁽¹⁶⁾

このように第一部がひとつの喪失から更なる喪失に至るというドラマであるとすれば、第二部はより深刻な喪失から一転して再生へと至る過程の

ドラマである。再生への第一歩をしるすのは第二部一章に出現する《自己の過去の検証》という initiation 成功の為に不可欠な要素であり、また初めて登場する《他者に対する charité または sympathie の感覚》である。そして後者（《ひとは自分が不幸であると感じる時、他人の不幸に思いを致す⁽¹⁷⁾》）が、第一部では理解不能であった initiateur たちの暗示が初めて主人公によって理解可能となるという事態の実現を可能にするのだ。すなわち、ここに来て初めて《分身》が敵としてではなく《仲介者》médiateur, initiateur として faute の自覚の中に認識される。

— Dieu est avec lui, m'écriai-je... mais il n'est plus avec moi ! O malheur ! je l'ai chassé de moi-même, je l'ai menacé, je l'ai maudit ! C'était bien lui ce frère mystique, qui s'éloignait de plus en plus de mon âme et qui m'avertissait en vain ! Cet époux préféré, ce roi de gloire, c'est lui qui me juge et me condamne, et qui emporte à jamais dans son ciel celle qu'il m'eût donnée et dont je suis indigne désormais !⁽¹⁸⁾

これ以後、《faute の自覚》と《他者への思いやり》というふたつの要素がからまり合って、主人公を原初の調和を取戻し syncretisme の理想が実現されたこの宇宙の再生を祝福する initié たちの至高の祝祭の夢である《Mémorables》へと導いていくのであるが、そこに至る過程で主人公の意識はふたつの極の間を揺れ動く。この《まだ間に合う》il est temps encore と《もう遅い》il est trop tard という formule に代表されるふたつの極の問題は、NERVAL における主要テーマ群のひとつである時間認識の問題に深く関わるものであり、そのきわめて大きな重要性についてここで詳述するのははぶくことにするが、この《もう遅い》という《遅れ》retard の意識が彼の全作品を通じて不吉さの象徴であり、死の世界からの脅迫であることは指摘しておきたい。⁽¹⁹⁾

それまでは時間の束縛からの解放が約束されていたはずの夢の世界の中

でさえ遅れ続けてきた主人公が現実の時間の流れの中で初めて《間に合う》（《私はジョルジュの家に時間通りに着いた》⁽²⁰⁾）のは第二部五章であり、それ以後この意識は二度と姿を現さない。この事実は次の章の《自分の一日の時間が二時間増加した》⁽²¹⁾という意識の現れとともに非常に暗示的であり、このことはすなわち主人公がある程度時間のくびきを超克し得たことを表わしていると解釈できる。そしてそれまでは自己の資格の欠如ゆえに夢の世界からの追放であり、苦痛そのものでしかなかった《目ざめ》（第二部四章および五章冒頭付近では睡眠そのものさえも奪われている）は、たとえば第二部五章においてはすでに苦痛としては認識されず、《Mémorables》叙述の直前に登場するそれは、その前の女神が initiation の試練の終わりを告げる夢のせいもあってか、この作品内での唯一の甘美な目ざめとなっている。また注目すべきは、これまでその力を失ない宇宙が永遠の夜の中に入ってゆく主因となっていた衰弱した太陽も力を取戻していることである。

Cette nuit-là j'eus un rêve délicieux, le premier depuis bien longtemps. (…)

La joie que ce rêve répandit dans mon esprit me procura un réveil délicieux.

Le jour commençait à poindre.⁽²²⁾

さて、第二部五～六章のこのような一連の変化は、そして女神が夢で告げる試練の終了などは何によるものであるのか。この疑問に対するこたえは第一部と第二部との間に存在する決定的な相違への着目によって発見が可能となるであろう。まず、第二部の最終部分（《Mémorables》のあとに位置するエピローグに相当する部分）に次のような述懐がなされているが、

C'est ainsi que je m'encourageais à une audacieuse tentative. Je résolus de fixer le rêve et d'en connaître le secret.

このような《夢を積極的に利用しよう》という姿勢の萌芽とでも言うべきものがすでに第一部最終章に現れている。

J'employai toutes les forces de ma volonté pour pénétrer encore le mystère
dont j'avais levé quelques voiles.⁽²⁴⁾

そしてこの姿勢こそが、夢という名の祝祭空間が試練の場であり自己が今その場に身を置いているのだという認識および一連の *faute* の自覚につながるのである。いわば第二部における変化の種子がすでに第一部最終章に現れているのだ。ついで第一部と第二部とを決定的に分っているもの、これこそは他者へと向けられた *charité, sympathie* に満ちた視線の登場にはかならない。前述の《ひとは自分が不幸であると感じる時、他人の不幸に思いを致す》という *phrase* のあとに現れるのはその *charité* に動かされた実際の行動の数々であり、その頂点に来るのは第二部第六章に登場する《見ることも話すこともせず、食事をとることも拒否する一人の患者》との出会いである。

Parmi les malades, se trouvait un jeune homme, ancien soldat d'Afrique, qui depuis six semaines se refusait à prendre de la nourriture.(...) Du reste, il ne pouvait ni voir ni parler et rien n'indiquait qu'il pût entendre. Ce spectacle m'impressionna vivement. Abandonné jusque-là au cercle monotone de mes sensations ou de mes souffrances morales, je rencontrais un être indéfinissable, taciturne et patient, assis comme un sphinx aux portes suprêmes de l'existence. Je me pris à l'aimer à cause de son malheur et de son abandon, et je me sentis relevé par cette sympathie et par cette pitié. Il me semblait, placé ainsi entre la mort et la vie, comme un interprète sublime, comme un confesseur prédestiné à entendre ces secrets de l'âme que la parole n'oserait transmettre ou ne réussirait pas à rendre. C'était l'oreille de Dieu sans le mélange de la pensée d'un autre.⁽²⁵⁾

結局ここで語られているのは、initiateur である《分身》との最終的な《和解》(他の作品においても幾多の《分身》⁽²⁶⁾が登場するが、すべて《篡奪

者》usupateur, 《宿敵》rival としてしか現れず、本来の自己とのいかなる《和解》も起りはしない)にほかならず、このあとに試練終了の女神のお告げが現れ、《Mémorables》の壮大な夢に至る背景にはこういったcharitéの行為が原動力として介在していると言えるのである。

以上のように非常に足早に見てきた事柄を整理してみよう。まず、Auréliaとは祝祭の観念を軸として *Voyage en Orient* との関連においてとらえてみれば、夢というもうひとつの祝祭空間が試練の場として機能しているひとつの *histoire initiatique* にほかならない。そして、この *initiation* は成功の為の不可欠の鍵として次のふたつの要素を持っている。すなわち、fauteの自覚から仮の死に匹敵する徹底的な自己否定(作品中では《une descente aux enfers》と表現されている)、そして他者へのcharitéというふたつの要素である。このような事実から、われわれにはAuréliaをこのふたつの要素を支柱とし頂点に《Mémorables》の夢という至高の祝祭(夢がもうひとつの祝祭空間ならば《祝祭の夢》とは二重の祝祭である)を頂くひとつの建築物のアナロジーとしてとらえることができるように思われる。

4) 結 論

NERVALの後期の作品群をつらぬく主要テーマ群のひとつは、自己の現実世界内での絶望的な行き詰りとこの宇宙全体の疲弊そしてそこからの脱出・再生への希望を自分自身および宇宙の過去のsouvenirもしくは夢・祝祭の世界のうちに求めるというものである。Sylvieとは《思い出を再構成する》recomposer les souvenirs⁽²⁷⁾ ことによるその試みが遂に失敗に帰するという物語であり、*Voyage en Orient* とは、Orientというsourceにおける祝祭という場でのinitiationに参入しようとして現実世界の厚い壁にはね返される旅人の物語である。唯一、Auréliaにおいてのみすなわち現実の

局面上にではなく、その様々な制約から自由なあの《第二の生》une seconde vie である夢の世界の中にその可能性を求めたこの遺作においてのみその試みの成功が語られている。この作品中で、彼は彼にとって失なわれたものすべて — 生誕の時からすでに大革命前後の思想風土によって奪われていた無垢の信仰、父親の世代のみが享受し得た戦争という名のもうひとつの祝祭空間の放っていた栄光、抑圧され忘れられた古代の神々に代表される失なわれた過去の黄金時代、顔を見ることもなく永遠に去っていった母、去っていった愛した女性たち — そういった失なわれたものすべてをよみがえらせ、再生させることに成功したのである。そのうえ、彼は《火の一族》と《泥土の一族》とのあいだに継続される絶望的な闘争(たとえば、*Voyage en Orient* 中の一挿話『暁の女王と精霊たちの王ソリマンの物語』)においてはこの争いは結局死によってしか帰結を迎えず、何らの解決をも見せない、この闘争に端を発する自我の不幸な分裂に《ひとつの完璧な解決》を与え、融合させ、宇宙に原初の調和を取り戻させることにも成功している。われわれには、彼がこのような成功を祝祭の観念が与えてくれる暗示の力に負っているのだと言えるように思われる。なぜならすでに見たように彼は祝祭と等価である夢によって与えられた initiation の試練の数々を乗り越えたのちに initié たちの祝祭に参入することを得たのであり、別の言葉で言えば、彼は仮の死ののちの華麗なる再生という祝祭の観念そのものを体現したのであるから。そしてその至高の祝祭とは、あの《永遠の現在》の夢想が現実となり、祝祭の観念を通して得られた syncretisme の理想が実現する場なのである。そしてまた《Mémorables》の夢の壮麗さも、光と音楽の乱舞⁽²⁸⁾と演劇性という祝祭の属性にささえられているのである。以上のような理由から、NERVAL が *Voyage en Orient* から *Aurélia* へとたどり来た道程の中で手中にし、《Mémorables》において最大限に発揮し得た手法を《祝祭の手法》とでも呼ぶことができるように思われる。

注

特に注記のある場合をのぞいて NERVAL のテキストの引用はすべて次の版に拠った。

Gérard de NERVAL, “*Œuvres*”, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard
Tome I, cinquième édition, 1974.

Tome II, troisième édition, 1970. (以下、P.1 I または P.1 II と略記)

- (1) 拙稿「ネルヴァルにおける祝祭の観念 — 《*Voyage en Orient*》= 祝祭の中の旅 —」大阪大学フランス語フランス文学会発行 GALLIA 20号 (pp.11-21)
- (2) 《Suivant dans ses ouvrages les progrès ou, du moins, la dernière transformation de la philosophie de son pays, ce poète a donné à tous les principes en lutte une solution complète qu'on peut ne pas accepter, mais dont il est impossible de nier la logique savante et parfaite. Ce n'est ni de l'éclectisme ni de la fusion; l'antiquité et le moyen âge se donnent la main sans se confondre, la matière et l'esprit se réconcilient et s'admirent; ce qui est déchu se relève; ce qui est faussé se redresse; le mauvais principe lui-même se fond dans l'universel amour.》
《Préface de *Faust* suivi du *Second Faust*》
Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval, Tome I, p.12 Minard, Paris, 1959
- (3) GALLIA 20号の拙稿参照。
- (4) Jean-Pierre RICHARD, 《Géographie magique de Nerval》in *Poésie et Profondeur*, Seuil, 1955, p.15.
- (5) 《Où vais-je? Où peut-on souhaiter d'aller en hiver? Je vais au-devant du soleil... Il flamboie à mes yeux dans les brumes colorées de l'Orient.》
Voyage en Orient, Pl. II, p.12
- (6) 《(…) il importait que mon retour à la santé fût constaté bien publiquement; et rien ne devait mieux le prouver qu'un voyage pénible dans les pays chauds; ce n'a pas été l'un des moindres motifs de me le faire entreprendre à tout prix.》
Lettre à son père de Constantinople, vers le 5 octobre 1843, Pl. I, p.947
- (7) *Lettre à Jules JANIN en mer, près de Malte*, 16 novembre 1843, Pl. I, p.953
- (8) *Voyage en Orient*, Pl. II, pp.104-105
- (9) 《Swedenborg appelait ces visions *Memorabilia*; il les devait à la rêverie plus souvent qu'au sommeil; l'Ane d'or d'Apulée, la *Divine Comédie* du

Dante, sont les modèles poétiques de ces études de l'âme humaine. Je vais essayer, à leur exemple, de transcrire les impressions d'une longue maladie qui s'est passée tout entière dans les mystères de mon esprit (…).》 *Aurélia*, Pl. I, p.359

- (10) *Ibid.* p.403
- (11) 草稿においては明確にされていた地名や人名および日時は決定稿においては、ほとんどすべて取りのぞかれている。
- (12) *Ibid.* p.412
- (13) *Ibid.* p.359
- (14) 《Peu à peu, je me remis à écrire et je composai une de mes meilleures nouvelles. Toutefois, je l'écrivis péniblement (…).》 *Ibid.* p.398
- (15) *Ibid.* pp.359-360
- (16) *Ibid.* p.382
- (17) 《Quand on se sent malheureux, on songe au malheur des autres.》
Ibid. p.387
- (18) *Ibid.* p.388
- (19) たとえば、『十月の夜』*Les Nuits d'Octobre* においては、この《遅れ》は終始主人公につきまとい、逮捕投獄、獄中の悪夢などの間接的原因となるばかりでなく、『enfer』、『purgatoire』といった語句の頻出の遠因ともなっている。詳述は他の場所にゆずることにするが、ほかにもこの類の例は多い。
- (20) 《J'arrivai chez Georges à l'heure précise (…).》 *Ibid.* p.399
- (21) 《Pour moi déjà, le temps de chaque journée semblait augmenté de deux heures (…).》 *Ibid.* p.403
- (22) *Ibid.* p.408
- (23) *Ibid.* p.412
- (24) *Ibid.* p.382
- (25) *Ibid.* pp.407-408
- (26) いくつかの例が挙げられる。たとえば、『*Voyage en Orient* 中の挿話『カリフ・ハケムの物語』に登場する主人公ハケムの《分身》は紛れもなく《篡奪者》として機能しているし、『*Sylvie* の主人公の乳兄弟グラン・フリゼも彼から *Sylvie* を《奪い取る》者である。
- (27) 《Pendant que la voiture monte les côtes, recomposons les souvenirs du temps où j'y venais si souvent.》 *Sylvie*, Pl. I, p.248
また、別の作品にも次のようなまったく同じ phrase が見い出される。

《Recomposons nos souvenirs.》 *Les Nuits d'Octobre*, Pl. I, p.107

- ㊦ 《Mémorables》の最初の四つのパラグラフを彩る次のような語群を見れば
このことは一目明瞭である。

《la chanson des patres》、《cette melodie rustique》、《en chantant》、
《le regard chatoyant d'une étoile》、《une perle d'argent》、《une perle
d'or》